

わたし と これから

夢を叶えた女性たち

vol.22

2016. September

女性には年齢を重ねていくことで
人生が変わるような出会いや印象深い
エピソードが訪れることがある。
そんな転機を経験した女性をご紹介します。

暮らしのクラフト ゆずりは 代表
田中陽子さん (61歳)

十和田湖畔の「暮らしのクラフト ゆずりは」は
木工、漆器、陶器、籠、家具、鋳物、織物など
東北6県の手仕事を扱う店です。
代表の田中陽子さんは東北の手仕事を
後世に伝えていくために、職人たちと共に
その価値を世界に向けて発信し続けています。

History

- 1955.02(0歳) 青森県三戸郡田子町生まれ
- 1977.03(22歳) 東京の大学を卒業後、青森へ
- 1978.01(22歳) 十和田湖の旅館後継者に嫁ぐ
- 1979.12(24歳) 長女が生まれる
- 1982.04(27歳) 次女が生まれる
- 1986.04(31歳) 新規事業のため、手仕事の職人を訪ね始める
- 1989.08(34歳) 十和田湖畔に「暮らしのクラフト ゆずりは」をオープン
- 1998.01(42歳) 東京・原宿にて初の展示会
- 1999.12(44歳) 中耳結核、がんを患う
- 2000.09(45歳) ラオスの手仕事を訪ねて2週間の旅に出る
- 2003.07(48歳) 店舗を移転、6坪から25坪の広さに
- 2007.06(52歳) エッセイ「ゆずりはの詩」(主婦と生活社)発行
- 2011.03(56歳) パリ日本文化館にて講演・展示
- 2013.06(58歳) 三越デザインウィーク「東北手仕事応援プロジェクト」展示
- 2015.09(60歳) フランス・アトリエ・エトール主催アート展「レボリューション」に東北復興支援の一環として出品
- 2016.05(61歳) パリ・エスパスアジアにて「ゆずりはコレクション」開催中(10月まで)
- 2016.09(61歳) 東京・南青山にて展示会(9/26~10/21)

夢を叶える毎日の習慣

朝、出かける前に玄関で必ず荷物を置いて、体の力を抜いて、手を合わせて、自分が真っ白になるのを待ってから出かけます。家を出るときも、出張先のホテルでも。無心になって仕事に向かうことができるようにする習慣です。



東北の職人たちの手仕事を後世に残すために その価値を世界に向けて発信していきたい。

職人たちとの交流から 生まれた店「ゆずりは」

田 中陽子さんが青森で旅館業の後継者に嫁いだのは23歳のときだった。以来、旅館の業務を手伝っていたが、30歳を過ぎた頃「地元

に貢献する」事業を担当することに。美術も工芸も知識がない中、十和田湖を囲む三県(青森、秋田、岩手)の手仕事の地図を作り、3年かけて職人の元を訪ね歩いた。直接会いに行つて仕事場を見せてもらい、職人と言葉を交わすうちに、豊かな気持ちになつている自分に気づき、何度も足を運ぶようになった。そして、20人の職人たちの協力を得て、1989年、

わずか6坪の小屋を改装した「ゆずりは」がオープンした。

ある日、突然耳鳴りが襲った。診断結果は中耳結核という難病。耳が聴こえない状態で仕事はままならず、周囲から孤立した気持ちになつていった。それでも入院先から出向いて東京で初の展示会を行い、再び入院。すると今度はがんが見つかり、手術を受けることに。一日も早い復帰が望まれているのに体が思うように言うことを利かない。追いつめられた精神状態から、田中さんはついに鬱病を発症した。

宿命を受け入れた先には さまざまな出会いがあった

再 び入院したとき、枕元にあつたのは一枚の切り抜きだった。

「高い精神性と篤い信仰心に育まれた手仕事の残る国、ラオス」という見出しに惹かれて、手帳に挟んでおいたのだ。田中さんはドクターの制止を振り切つてラオスの手仕事を訪ねる2週間の旅に出た。



職人たちを一軒一軒訪ね歩くことから始め、作り手と一緒に試行錯誤するうちに、強い絆が生まれた。

置かれていた状況の中で淡々と暮らし、笑顔が絶えない。その暮らしが輝いて見えた。その姿を見たときに、自分の身に起きたすべてのことを受け入れ、新たな気持ちで東北の手仕事を発信していこうと決心した。田中さんは45歳になつていた。

その後、職人たちとの出会いを綴ったエッセイ集を出版するなど、発信を続け、遂に2011年にはパリで「東北の手仕事」の展示と講演会を行うが、その直後に東日本大震災が起こった。

震災後、職人たちの状況は低迷していた。工芸品は生活必需品ではないため、震災の影響で需要が激減したのだ。「このままでは、東北の手仕事途絶えてしまうかもしれない」。危機感を抱いた田中さんに対して、国内外の災害復興・開発支援を行っているNGOが支援の手を差し伸べた。

「海外の人は日本文化の素晴らしさに気づいている。その気づきが日本中に広がれば、職人たちの原動力になるはず」。そう考えた田中さんは、前回のパリでの体験を生かして、再び海外に向けて活動を始めることにした。

東北の手仕事を世界へ 世界の職人たちを日本へ

様

々な努力が実を結び、2015年9月、Ateliers d'Art という、フランスの職人3千人を束ねる組織による2年に一度の展覧会に出展することになった。パリの会場には、選りすぐった東北の職人や作家による作品の数々が並んだ。シンプルで温かみのある展示ブースは、訪れる人々に「ここから出たくない」と言われるほど好評を博した。

ここで一つの出会いがあった。展覧会の会場で、パリに住む日本人キュレーター、シユクコボスさんに声をかけられたのだ。「東北の手仕事を「ゆずりは」のコレクションというかたちで展示しませんか?」。その言葉に田中さんの心は躍った。それをきっかけに、今年2月、パリで東北の



上) Ateliers d'Artの展示会場
下) パリの工芸職人たちと

手仕事をアピールする展示会が実現。アジアの文化をヨーロッパで紹介している旅行代理店のギャラリーで行われた展示「Tokoku」は好評を得てロングランとなり、さらにリヨン、トゥールーズで順次展示会を行なう予定だ。

田中さんは今、パリの職人たちによる工芸品の展示を計画 중이다。そのとき、フランスの職人と東北の職人を引き合わせることを楽しみにしていると言う。「国境を越えた職人同士が出会い、思いもよらない見方や考え方に触れたら、東北の手仕事を今の暮らしに生かすための新しいアイデアが生まれるかもしれないと思つています」。

今では国内300名を超える職人たちと交流を持つ田中さん。今後は東北から世界の職人へ、その輪が広がります。

読者へのメッセージ

明日のことばかり考えるのではなく、先のことを考えるようにしてみませんか。直近のことだけを考えると視野が狭くなります。遠くを見ることで視野が広くなり、今の苦勞も乗り越えられるはずですよ。

暮らしのクラフト ゆずりは
<http://www.yuzuriha.jp>



*キュレーター…展覧会の企画・構成・運営などを担当する専門職。